病院図書室　19(3):176-180,1999

「雑索」（ざっさく）を知っていますか？
－日本語文献のVerifyのために－

中村　雅子

1.はじめに

書棚2段を軽く占有してしまうあの重厚なIndex Medicus(以後「IM」という)が、インターネット版MEDLINEとして無料で使えるようになったのは、いまからほんのわずか2年6ヶ月前の1997年6月26日のことだ[1)2)]。図書館間相互貸借制度（以後ILLという）を活用した『文献取り寄せ』のためのVerify（書誌事項の確認作業）に手間暇をかけ悪戦苦闘していたあの日々はいったい何だったんだろう？と思わせるような大ショックだった。

2.日本版MEDLINEとなりうるモノは何か？

病院図書館において普及してきた医療分野の雑誌記事索引は、「IM」と医学中央雑誌（以後「医中」という）である。しかし、先の報告[2)]が、「IM」に対比する日本の索引として想起したのは、医療者が使う「医中」ではなく、一般の図書館利用者を対象とした国立国会図書館の雑誌記事索引（以後「雑索」という）だった。「雑索」が日本版MEDLINEとなりうるモノなのか、私自身の「雑索」に対する印象は1985年の知識[3)]のまま留まっていたので疑問に思わざるを得なかった。

これをきっかけに日本の雑誌記事索引について調査していくうちに、Verifyのツールのひとつとして手軽に使えそうな日外アソシエーツ㈱「NICHIGAI/WEB」の「雑索」を見いだした。

なかむら　まさこ：大阪府立母子保健総合医療センター図書室
企画調査部司書（非常勤作業員）
E-mail:Hanfubol@mch.pref.osaka.jp

3.インターネット上で使える日本語文献データベース

場所ばかりとる「IM」も、高価なCD-ROM版も、もういらない。「インターネットさえ使えればMEDLINEが無料になる」と、熱に浮かされたようなインターネット導入要望が異常に盛り上がった。そしてそれが実現できたとき、はたと気付かされ急浮上してきた関心事は、インターネット上で使える日本語文献データベースの存在である。図書館利用者・インターネット整備担当者・図書委員会・施設管理者などから相次いだ「日本語の文献は何で探すの？」という質問には、1999年4月時点で、インターネット版「医中」がまだ存在していない以上、それ以外の手段を調査して答える必要があった。

1999年5月25日、副院長の要請により図書委員会で「医中」、JICST、Nacsis、「雑索」、などを15分程度で紹介した。インターネット上の医療分野の文献検索は、個人単位では既に可能になっていること、コメディカルには医療分野以外の人文・社会分野の文献情報が必要であること、を説明した。さらに、雑誌「看護」の最新看護索引速報版が1999年1月から掲載中止となっている事実を報告した上で、看護職の図書委員に看護文献の検索ツールの整備に関心を持つよう訴えた。おりしも、4月14日に届いた看護図書館協議会会誌「看護と情報」第6巻[4)]を熟読したばかりだったので、医師の要望にばかり引っ張られがちな図書委員会の雰囲気にもめげずすべての職種の図書館利用者が使える雑誌記事索引の紹介を確信を持ってできた。

この経験を踏まえた上で、6月17日に開催

された近畿病院図書室協議会（以後KHLAという）第90回研修会の３つめの演題の中で「雑索」を紹介した。KHLA研修会では、これが初めての「雑索」との出会いといえる。

4.印刷体「雑索」のディジタル媒体化

元索引作成者という立場からの公共図書館における「雑索」印刷体の有効活用の提言[3]には、皮肉にも印刷体索引の限界が吐露されている。まさにこの提言が出された1985年頃から「雑索」は変わり始める。

「雑索」は、1949年2月に創刊され、1996年5月に終刊した。限られたコスト・人的能力のもとで、雑誌受け入れから収録までのタイムラグの短縮と、より多くの収録誌数をめざした結果、1984年受け入れ分から、ディジタル媒体へと変貌した。利用拠点は印刷体時代同様、都道府県立・政令指定都市立の公共図書館や大学図書館などに限定されはするが、オンラインやCD-ROM導入により利用者自身による直接検索が可能になった[5][6][7][8]。さらにインターネット上にのることにより、一般個人が自宅からでも気軽に使える廉価なものとなったのである[9][10]。

2002年度から「雑索」の無料化を企図している国立国会図書館の方針[11]に先立ち、「雑索」の書誌事項のうちの一部分だけではあるが、無料で一覧できる「WEB/NICHIGAIASSIST」サービスが1999年12月1日より開始された。また、「雑索」のいまの時点での収録範囲は1985年以降だが、2000年3月より1975年～1985年が追加される。詳細は日外アソシエーツ㈱のホームページ、http://www.nichigai.co.jpで確認すること。10日間無料のお試し期間があるので是非トライして欲しい。

5.「NICHIGAI/WEB」の「雑索」

実際のNICHIGAI/WEBの「雑索」とはどのようなシロモノなのだろうか。どんなことができるのかという観点から以下に実際例をいくつか挙げてみる。

＜事例１＞

「イギリスのエージェンシーについて□▽氏が書いた論文が○△大学から出ていると知人から聞いたが入手できるか」

てがかりは、キーワードとして「イギリスのエージェンシー」、著者名、大学名。だが、既存の「医中」では見つからない。「雑索」でキーワードと著者名を掛け合わせて探すと３件表示。その中に大学名を冠した誌名を持つものがあり、依頼者の求めているものがみつかった。（検索日1999-8-10）

＜事例２＞

「参考文献に挙げられている研究報告書中に収録されている論文を入手したいが、報告書の名前が不明」

論文名と著者名が明確だったので、「雑索」で関連文献をいくつか探しだし、その中から当館で所蔵している文献に実際にあたった。すると、当該テーマの研究費の給付元を明示しているものがあり、報告書の名前と研究年度が判明した。書誌事項が明確になりさえすれば、図書館などでの所蔵調査が可能になる。（検索日1999-11-30）

＜事例３＞

「出生前検査・診断」

収録発行年月は、1985年３月から1999年11月までとし、総件数87件中、「医中」収録誌19誌64件、大学・研究機関誌14誌14件、その他一般商業誌７誌９件であった。書き手と対象が「医中」の医師・看護職・コメディカルなどからなる医療職に集中するのに対し、「雑索」ではあらゆる学・業界の職種に広がる。視野が広がるということは、「出生前検査・診断」についての意見を多面的にとらえることを可能にする。この検索結果のうち当館では９誌37件、市立図書館では３誌４件を借りて読む事ができた。大学の紀要などは市民開放している大学図書館で読める。（検索日1999-12-24）

事例1は、「医中」未収録の雑誌論文の事例である。病院経営が逼迫しつつある環境では、このような要望にも対応できるようILL環境を整備しておく必要があろう。

事例2は、「医中」でもできるいわゆる孫引き芋づる検索の手法だが、数年分を一度に検索できる「雑索」の方が効率が良い。

事例3は、「一利用者の視点で文献を探してみたら」とシュミレーションしてみたものである。収録誌はすべて国立国会図書館所蔵の雑誌ゆえに、有償ではあるが個人的に入手できる。収録されている文献の入手に障害が多いのは考えものだが、「雑索」ならば100%入手可能という安心感がある。

6.「WEB/NICHIGAI ASSIST」の「雑索」

無料で使えると紹介した「雑索」は、「WEB/NICHIGAI ASSIST」の中の「Web MAGAZINEPLUS」のことで、「雑索」のほかに機械振興協会・経済文献研究会・日外アソシエーツが作成したものが含まれている。

「WEB/NICHIGAI ASSIST」は、この「Web MAGAZINEPLUS」と「Web BOOKPLUS」、「Web WHO」の3つのデータベースで構成され、それぞれが独立していて「Web WHO」以外は、論題・雑誌名(書名)・著者名の一部分の一覧表示までは無料だ。正確な書誌事項まで表示させると1件毎に課金されるので、無料に徹したい向きにははがゆいところだろう。

「Web MAGAZINEPLUS」では、検索時に発行年月の範囲指定ができるので、それを駆使すれば頁数まではわからないにしてもおおよその収録月や号数がわかるので、使い方次第では大変便利だ。

「Web BOOKPLUS」では、中途半端な書誌事項からでも他の無料のサイトで完全な書誌事項を再構築できるので全く問題はない。ただし、本好きの筆者としては有料サイト「NICHIGAI/WEB」の「BOOKPLUS」の方が、仕事を離れた図書館利用の際には大変面白くて楽しいデータベースだと思っている。データベースが整備されると購買意欲が益すといわれているが、それを自ら実証するようでもある。

7.「WEB/NICHIGAI ASSIST」の「Web WHO」

＜事例4＞

「1962年発行のある外国誌のVol.26に収録されている『Shimamura M』という日本人著者による文献の所在調査」

学術雑誌総合目録を見るとどうも巻と発行年が一致しない。Verifyする必要があってもMEDLINEでは1966年からの収録なのでVerifyができない。わからないまま所蔵館を紹介するのはためらわれ、そこで、「Web WHO」で著者名から探すことを思いついたのである。たまたま「WEB/NICHIGAI ASSIST」の試用許可を得ていたので使ってみることにした。著者名表示がローマ字であったため、そのまま読みがなに換えても「しまむら」までしかわからない。従って名前は「しまむら」でかつ医学関係という大雑把な検索となった。数十件を一覧するうち「島村宗夫」にたどりつき、その項目下の文献一覧を開くと1963年発行の該当文献が見いだせた。実際の有料という条件でここまで検索するとかなり高額になるだろうが、日本の著名人の先駆的な文献が探せるという点では、とても優れたデータベースである。その他にも関連文献があり、そのうち当館で所蔵している雑誌論文を実際に確認したところ、著者自身が参考文献として挙げた中に1963年の英語論文が正確に掲載されていた。(検索日1999-12-10)

8.雑誌論文のVerify

当館では、1997年5月からKHLAより委嘱を受けて学術雑誌総合目録による雑誌の所在調査に当たっている。いまではインターネット環境が整いさえすれば、Nacsis-webcatを駆使し自力で所在調査が可能だ。そういった環境にない病院図書館の担当者からの依頼を受けて所在調査を代行しているのである。本来は学術雑誌総合目録を使った所在調査だけでよいのだが、依頼者の多くは所在調査のツールがないだけでなく、Verifyのツールすらな

く、あっても使いこなされていないのが現状である。従ってVerifyされていない依頼内容が多く、Verifyをも代行せざるを得ない。この代行Verifyのためだけに使った「雑索」経験は多いのだが、当館利用者の依頼による利用経験は少ないため、文献検索のツールとしての評価はまだ出せない段階にある。本稿のサブタイトルを「Verifyのために」としたゆえんである。

9.訂正記事の取り扱い

「医中」に訂正記事の収録方針がないことは、以前KHLA会誌上で述べた。「雑索」には訂正記事を洩れなく収録するという一貫した方針はないにしても、訂正記事とおぼしき表示を見いだすことがある。

＜事例5＞

標題　「くすり」欄の訂正［「FUT-187の胃切除後逆流性食道炎に対する臨床第3相試験成績－プラセボを対照とした二重盲検比較試験」］

誌名等医学のあゆみ[ISSN:00392359](医歯薬出版)189(4) 1999.4.24 p254～259

備考　NDL請求記号Z19-96
【日外整理No.ZP111708】

(検索日1999-8-28)

元の文献と訂正記事の双方を相互参照する構造にはなっていないが、医療専門職が日常的に使用することを前提にしている「医中」には収録されない訂正情報が、一般市民も利用できる「雑索」には収録されている、という現実を目の当たりにして「雑索」の網羅性の凄さを実感した。

10.日本版MEDLINEとしての「雑索」

「医中」の簡易情報を「雑索」にコンバートする形で集約できないものだろうか？この思いつきは突拍子なくもない。現に「WEB/NICHIGAI ASSIST」では、書誌事項の一部分を無料公開している。もっと、詳細な情報を求められたときには「医中」が欲しいだけ課金すればよい。JICSTとの協力が可能ならば「雑索」ともできるはずで、医療とそれ以外の学問分野との間に垣根を作る必要性がどこにあるというのだろう。無料で使える魅力あるデータベースが増えれば、インターネットはもっと普及する。それは、無料のMEDLINEを使いたい一心でのインターネット導入熱に似ている。加速の度合に差があるとすれば、米国のMEDLINEと自国のデータベースとの求心力の差によるものであろう。魅力ある「雑索」の無料化は、海外からのアクセスを増やすことにもつながる。誇りを持てる「雑索」の構築を期待している。

11.「雑索」の無料化が次にもたらすもの

今の学生はその所属する大学図書館などで、「雑索」などの豊富な索引群を自由自在に使えるやに聞いている。卒業して社会人になれば、一般市民として居住する市町村立の公共図書館の利用者となるが、かつて自在に操れた索引群がそこにはないことに、必要に迫られたとき初めて気付くことになる。

自分や自分の家族が病になったときに近所の書店や市立図書館に満足できず、セカンドオピニオン的に「医学図書館」を想起するのは当然だろう。しかし、それは現実問題として無理だ。

医療専門図書館側に居るわれわれ病院図書館担当者は、いまある医学図書館・病院図書館がどのような情報環境の構築過程を経てきているのか、その暗部をよく知っている。医師への医学文献情報の提供が、無料でそれこそ湯水のごとく製薬関連企業からもたらされ続けてきた事実をよく知っている。その恩恵に寄りかかり図書館としての整備を怠ってきたために、いま、その遅れを縮めるのに必死である。

同じ轍を踏むまいと考えるのなら、一般市民にも公共図書館にも、情報環境整備へのコスト意識をもっと訴えるべきだ。日本の図書館はまだ発展途上だ。インターネット上だけ無料のデータベースを提供してみても、津々

浦々の公共図書館が成熟していない今の段階では、絵に書いた餅でしかない。医療専門図書館への過度の期待や棲み分け論は排除して、ILLの基本に立ち戻るべきだと考える。

12. 自館の利用者を情報弱者にしないために

「雑索」をMEDLINEに対比させていた[2]岡部は1999年4月にアメリカの図書館による「情報への平等なアクセス保証」の最新動向について報告している[12]。日本では、同じステップでことは進まないかも知れないが、少なくとも図書館員は、最先端の情報へのアクセス手段について、利用者に積極的に語れるようにならなくてはならないだろう。

予算がない、蔵書も雑誌も少ない上に、病院図書館員としての作業時間も能力もないという過酷な状況の中にあってでも、病院職員の情報へのアクセス手段を確保する責務が、病院図書館員にはあるはずだと考えざるを得ない。

13. おわりに

「雑索」に全く馴染みもなく、全く関心もない病院図書館員に「NICHIGAI/WEB」の「雑索」の検索事例を紹介した。この「雑索」を使うことで一般市民が医療情報にぐっと近づきつつあるという兆候に、病院図書館員はもっと関心を寄せるべきだとの動機を持って本稿に着手したのである。従来からある「医中」一辺倒への固執にも反省を促したいと思う。

ある日突然、あなたの勤務する病院図書館に「雑索でみつけた論文を読ませて下さい。」と、一般の人々がやってくるのもそう遠くないことと予想される。

なお、本稿で紹介したNICHIGAI/WEBサービス雑誌記事索引ファイルの使用は筆者自身の個人契約によるものである。当館での法人契約については、1999年5月25日図書委員会での提案のみに留まり、未だに検討されていない。

1）小田中徹也．Free MEDLINEへの招待．病院図書室 17(4)：122-134,1997

2）岡部一明．アメリカの医学データベース「メドライン」の無料公開．図書館とメディアの本ず・ぼん　5：64-75,1998-10-1

3）田中隆子．雑誌と公共図書館．みんなの図書館　93：2-10.1985-2

4）特集　看護図書館に求められる新たな視点：雑誌記事索引誌とその展望．看護と情報　6：52-79,1999

5）国立国会図書館逐次刊行物部．『雑誌記事索引』の新しい計画について.専門図書館　154：50,1995

6）国立国会図書館逐次刊行物部．ごぞんじですかPART 1 国立国会図書館の『雑誌記事索引』が変わりました。専門図書館　159:42-45,1996

7）関野陽一．ごぞんじですかPART 2 雑誌記事索引の将来 JOINTの経験を踏まえて．専門図書館　159：46-48,1996

8）逐次刊行部索引課．『雑誌記事索引』のペーパーレス時代元年．国立国会図書館月報　429：12-14,1996-12

9）堤豊．ディストリビュータによる最新情報:日外アソシエーツのデータベースサービス(特集=サーチャーのためのデータベース最新事情)．情報の科学と技術　47(8)：420-422,1997-8

10）長谷川秀記．電子図書館と出版社:3.2.2 電子出版の新しい流れ(6)データベース系の動き．In：原田勝，田屋裕之，編集．電子図書館．東京:勁草書房;p.61,1999-7-15

11）逐次刊行部索引課．雑誌記事索引の業務改革1994年～2000年．国立国会図書館月報 464：2-18,1999-11

12）岡部一明．アメリカ：公共図書館の商業データベース提供．現代の図書館　37(2)：89-97,1999